

A Study of Joseph Conrad

“Heart of Darkness”

Toshihiko Ueki

小説 *Heart of Darkness* が作家 Joseph Conrad を生んだと言われるのは、Congo 河遡航の体験が彼の健康を害し、船を降りることを決意させたことにもその一因はあるが、遡航の体験が Africa におけるヨーロッパ社会の理想主義の裏に隠された政治性の陰険さを彼に教えたこと、又遡航の体験そのものが彼の人間性に深刻な影響を及ぼし彼の初期の作品の主人公に見られる実直、勇気、憐れみ、信頼といった実に単純な徳に向けていた眼を道徳的、社会的善を踏み起して、より深い人間性探究へとその眼を向けさせた点にある。1890年6月13日から8月1日迄の“Congo Diary”を読めば分かるように、Conrad は彼自身の遡航の体験から、今迄、信頼を置いていた確固たる観念自我の道徳的基盤に疑惑を投げかけ観念自我と新たに自己の内に発見された赤裸々な真の自我との差異に苦悩する主人公を——スケールと内容の深さ、物語の展開手腕に於て初期の作品をはるかに凌駕しているのであるが——人間の心奥に渦巻く意識されることのない知的判断の域を脱した evil の問題を、近代ヨーロッパが造り上げた機械文明、理想主義、実証主義等の“観念的歪み”と関係付けることによって approach しているのである。

I

Before the Congo I was just a mere animal. と Conrad は Edward Garnet に書き送っているが、Conrad の分身と考えられる Marlow が空白の Africa の地図に魅せられたのは少年期以来の冒険的精神の憧れだけでなく、Marlow の中に機械文明に、粹に嵌った文化的な生活に反発し、より赤裸々な真実を求めようとする感情が働いていたのであろう。彼はそうした感情を『Parris は——いわゆる諸観念と機械文明の産物として、ヨーロッパ社会に君臨し、醜悪な死相、虚偽、怠惰をその美しく、真実の如く装飾されたきらびやかな光の下に隠し、人々をして頭を下げせしめ偽りの平和と安らぎを与えてきた人間英知の居城の象徴——白く塗られた墓が連想される都市』と断言しているのである。かくして Marlow はより粗朴な人間性の真実を求めてアフリカ大陸に向かったのである。しかし彼が眼にしたものは、現実とは思えぬ程、アフリカの大地、自然と遊離した現象であった。アフリカ大陸の奥地に居る敵と呼ばれている土人のキャンプに向って大砲の弾丸を打ち込んでいるフランス海軍の艦船、それでいて弾丸を打ち込まれたアフリカ大陸の表面には何一つとして変化が現われぬおかしさ、出張所の庭に転がっている機械類、無意味な爆破、罪人と呼ばれ鎖に繋がれて労働に喘いでいる土人、あるいは瘦細り風のような存在となり死を待っている土人、それらは文明社会に汚染されていない野性味あふれるアフリカの姿ではなく、計画性も確実性もなく利益のみを追求するヨーロッパ文明の疫病に虫ばまれ、その独自性を消失しつつあるアフリカの姿であった。“weanig those ignorant millions

from their horrid ways.” “Each station should be like a beacon on the road towards better things, a centre for trade of course, but also for humanizing, improving, instructing.” 等々の実に立派なヨーロッパ的博愛主義に基づいてなされている行動がアフリカそのものの搾取であった。ヨーロッパ人が未開のアフリカ蛮人を啓蒙する為に持ち込んだ機械文明、観念、法律等はアフリカ蛮人達が古来より受け継いで来た生活様式と何ら関係がないばかりでなく、彼等個々の習慣を、伝統を打ち破り、生来の彼等ではない彼等を生み出しているのである。ヨーロッパ人がヨーロッパ社会の基準を蛮人の生活に適用し、ヨーロッパ社会の法律を犯した者を正義の名において罰する時、ヨーロッパ社会の正義とは何なのであろうか？ 貨幣経済社会に全く未知な彼等に俸給として針金を与えることはヨーロッパ人にとっては良心的な道徳的行為であろうが、彼等、貨幣経済に馴んだことのない蛮人にとって、それは全く価値のない単なる針金に過ぎないのである。文明社会人の眼からすれば、そうした行為にはそれ相応の理屈が伴うのであろうが、そこにはアフリカの現実を全く無視したヨーロッパ社会人の理屈っぽい身勝手が見られている。象牙採集、植民地拡大といった願望を満たす為に、現代社会人にとって都合のいいように現実を歪曲しているのであり、彼等の願望を成就するのに障害となるものを悪とするならば、彼等、ヨーロッパ人の正義とは、武力と豊かな物質、虚偽の観念に支えられた弱い者からの搾取、略奪に外ならないのである。そして略奪、残忍、搾取等の醜悪な文明行為を覆い隠す為に、ヨーロッパ社会は何らかの方法でもってこれらの行為に正当性を与え、崇高なる理想への手段にまでその行為の意義を高め、その行為を平凡な人間がその認識能力をもってして決して真実を見抜くことの出来ない外なる領域へ移してしまわなくてはならない。そうすることによって現代社会人は自己の行為に驚くことなく正義の名において、良心の苛責を受けることなくそうした行為を推行出来るのである。故にヨーロッパ社会の正義とは俗悪な人間本性と、計画性も確実性も持たぬ観念をも超越した混沌とした現実を人間の眼から覆い隠してくれるような壁 (illusion) となるのである。

Marlow はそうしたヨーロッパ共同体のもつ ideal conception, 換言すれば、ヨーロッパ的な善、愛に我慢出来なかったのである。こうした欺満的なヨーロッパ共同体の隠された意図に対する嫌悪感を France の船会社を出た時の彼は次のように表現している、

I was just as though I had been let into some conspiracy — I don't know — something not quite right; and I was glad to get out. 1

又、彼は嘘をつくことに対しても次のような感情を抱いている。

You know I hate, detest, and can't bear a lie, not because I am straighter than the rest of us, but simply because it appalls me. 2

我々はここにおいて Conrad の初期の作品の主人公である船員のもつ実直さ、正直さを再度 Marlow の中に見る。それと同時に我々は Marlow の仕事に対する忠実さ、及び彼が英国人らしく非能率的な仕事振りに強く反発を覚える気概の持ち主であることも知るのである。⁽³⁾ 何一つとして実際的な仕事をするわけでもなく、無為に出張所の庭をぶらぶら夢遊病者の如く歩き回

り、互いに陰口をささやき、陰謀をめぐらし、象牙を少しでも多く集められる地域に派遣されることを希望しながら、いざ自分で事をする段になれば何一つとして自主的にやろうとする気概もなく、使徒の名に恥じる pilgrim 達、底に穴の明いたバケツで水を汲み“everybody was behaving splendidly, splendidly”と叫びながら駆け去っていく男の馬鹿げた姿、又アフリカの現実とは全く似つかぬ真白な服を着、同僚の死に接しても全く無頓着な会計主任、人につけいり何とか出世の糸口をつかもうとする mephistopheles 的な若者、こうした現実と理想、真実と虚偽とを見分けることの出来ぬアフリカの悪夢に取り付かれた彼等と、自己の仕事に熱中し人生の事実をしっかりとつかんでいる自己との差異を Marlow は強く確信している。すなわち、Marlow はアフリカ大陸においてヨーロッパ人が捕われている悪夢に彼は未だ捕われていないのである。Marlow は信念のない彼等を強く嫌悪し、彼等と同類であることを心情的に拒み、逆に太古の原始林の中で生きる蛮人の打つ太鼓の響きと彼の心臓の鼓動の一致は彼等両者の人間的距離が時間的にどれ程隔たっていようとも、混沌とした赤裸々な真実の中で自己の力を信頼して両者が生きている点において結びついているのである。

Kurtz が悲劇の領域に足を踏み入れたのはこの自己の力を欠いていたことに起因している。Kurtz はその出生からしてヨーロッパ社会を代表する人間であり、彼の特徴である一つのものに熱狂する性格は、理想主義の奥底には醜悪な絶対に解き明かすことの出来ぬ人間本性の矛盾が隠されていることには全く気付かないままに、ヨーロッパ文明の落し子なる——科学と道徳——理想主義を深く信仰し、文明と進歩を蛮人に教化することを志ざしてアフリカに来たのである。しかし科学と道徳によって築き上げられた真実を人間の眼から覆い隠す壁が平凡な人間に取り囲まれた生活環境と警察国家の拘束が全く存在しない大木の生茂る森林、茫漠たる水流、鬱然たる沈黙、熱した大気、死と太古の匂いを発する生きながらにして死したる河、どんな意味でも平和と呼べるものではない何か神秘的、測り難い意図と仮借ない力を秘めた自然によって取払われ、このアフリカ大陸の奥地に Kurtz が唯一人取り残された時、彼の教えられた理想主義の輝ける崇高なる観念と、暗国大陸における時間、規律、法則を持たぬ予測を許さない現実との余りにも大きな差異は彼の進むべき理想主義の道の前に立ちほだかり、美しいものがもつ魅力と同等の醜い暗国大陸の無秩序な自然の魅力が彼に襲いかかり、自己の内なる力からではなく、科学と道徳によって作り出され、文明社会から批判することを許されずに彼に与えられ教えられてきた欺瞞に満ちた理想主義の甲冑に身を固めてはいるが、その奥底には何一つない空虚な彼に

it (i. e. wilderness) had whispered to him things about himself which he did not know, things of which he had no conception till he took counsel with this great solitude —— and the whisper had proved irresistibly fascinating. 4

人間的良心と理性によって生み出されたヨーロッパ共同体のもつ高尚な生活処方箋である理想主義とか、希望とは全く関連性をもたぬ荒野はその醜悪なる魅力と威嚇によって彼を引き付け、荒野のもつ真実をひしひしと彼に感じせしめる時、社会の拘束には従がうが、自己の内なる自制心を欠き、何事にも夢中になる Kurtz は荒野という今迄の生活環境とは違った領域に足を

踏み入れ、置かれた環境の影響を、自己の内なる力を欠く故に、より強く受け今迄とは違った感じ方、違った考え方をし始め、置かれた真実の無秩序な現実には陶酔しだしたのである。Kurtz のように何事にも夢中になれる人間がある一つのこと熱中しだす時、以前の狂信の対象 (ideal truth) は脆くもその光を、意味を失い空虚なものとなり崩れ落ちるのである。

Then I noticed a small sketch in oils, on a panel, representing a woman, draped and blindfolded, carrying a lighted torch. The background was sombre — almost black. The movement of the woman was stately, and the effect of the torch-light on the face was sinister.
5

この文章は文明社会により真実の現実世界を見られないように目隠しされ、自分こそ文明の torch をかかげアフリカ大陸の暗黒に光明をもたらすものと信じている Kurtz の姿を象徴しているのであろうか？あるいは目隠しを外ずされた時、眼にするアフリカによって象徴される余りにも広く暗い闇の現実世界を照らすには文明の torch は余りにも弱すぎ、そのあまり失望し遂には闇の世界に汲まれる Kurtz を暗示しているのであろうか？それとも自己の描く観念的な理想世界の中にしか生きてはいない Kurtz の許嫁、Marlow の叔母を初めとする女の世界の象徴か？又は闇の真実を見ることなく我々こそは文明の光明のもとに生きていくと信じている文明社会の人間を ironical に象徴しているのであろうか？いづれにせよ、この文章には暗黒の魅力に取付かれた Kurtz が暗黒の世界と対決せねばならぬ運命が暗示されているように思われる。

the dugout, four paddling savages, and the lone white man turning his back suddenly on the headquarters, on relief, on thoughts of home — perhaps; setting his face towards the depths of the wilderness, towards his empty and desolate station. 6

ここにおいて Kurtz はヨーロッパ共同体に帰ることを拒み、彼を待ちうけている名誉、許嫁、しあわせな生活、迷盲の鬼火である現代社会の理想主義に訣別を投げかけ、彼を待ち受けているものは何もない恐怖と憎悪の念をかきたてる荒野の闇の世界に魅かれて、Marlow が求めたより遙かに赤裸々な primal な真実の世界へと、すなわち、彼が最も神聖なりと考えていた理想主義を荒野によって侮辱された彼の魂は新しい戦いを荒野に挑むためにその闇の心奥へと進んでいったのである。その行為は未知な、永遠に恐ろしい未来に向かって進んでいくことであり、人類の理想に唾を吐きかけ、狂気の領域への侵入でもあり、その世界に存在するものは現在まで想像もされなかったような現実であり、偉大なる Kurtz の絶望の世界である。Kurtz は傲慢な夢想者であり、ロマンティストであり、想像されうる未来の幸福な社会機構の熱烈な狂信者であり、人類の幸福に献身していると信じていた人間であったが、突如として自分の崇高なる理想主義と夢との無力を認識した人間であった。彼は自分の思想が無秩序な、文明に接したことの無いアフリカの蛮人に確固たる方向を与え、恩恵を施し得るものと空想していたのであるが、その理想や観念が蛮人を救済し、その苦悩を軽減させてやるにはアフリカという primal truth が支配する荒野の前では余りにも無力であり、現実との差異がはなはだしく、彼を魅惑し続づける力を失った時、Kurtz は野蛮な力を探し求めたのである。そして彼の獲得した力は彼に如何なる救いを与えるか

ではなく、彼にはその力もちいて文明社会の観念とは全く無関係に何をなしうるかという孤独な、つまらない彼個人の問題を提出したのである。この暗黒の世界に置かれた彼は、その行為には観念論や理想主義の崇高さなどはなく、ひたすら彼の内なる野蛮な力への本能に従って行動に出るのみである。彼の行為は人間の眼から現実世界の無時間性、無法則性を隠し誰にとっても一様な分かりきった定義づけをされるような、ありふれた明瞭な諸現象、限られた知覚領域の中に人間をとじこめ足かせをつけることをその任務としている実証主義や、観念論の領域をはるかに起えた、人間本来の欲望に基づく行為の存在する暗黒の領域、人間の知覚範囲を起えた領域にある。

He must meet that turth with his own true stuff —— with his own inborn strength. Principles won't do. Acquisitions, clothes, pretty rags —— rags that would fly off at the first good shake. 7

There was nothing either above or below him, and I knew it. He had kicked himself loose of the earth. Confound the man! he had kicked the very earth to pieces. He was alone, 8

Kurtz は科学や道德の規範にはまった観念世界（作り上げられた現在世界）の領域を踏み起えて悲劇の領域世界（真実の現実世界）へと飛び出したのである。そしてこの悲劇の領域とは Kurtz が *idealess truth* に立ち向かい演づる役割りであり、演づる役割りから生づる精神的苦悩である。Kurtz が国際蛮習防止協会への報告書の中に

we whites, from the point of development we had arrived at, must necessarily appear to them (savages) in the nature of supernatural beings —— we approach them with the might as of a deity, and so on, and so on. 9

と書いているように彼等、蛮人、の神として彼は君臨したのであろう。彼が蛮人の言語を習得し、持ち前の熱情的な雄弁をもってすれば、彼が神としてあがめられその役割りを演づることは決して難しいことではない。F. R. Reaves を初めとして今日迄 *unspeakable rite* と論じられてきた Kurtz の役割りについて Stephan A. Reid は Sir Geoge James Frazer の研究を支持し、アフリカ蛮人についての風俗、習慣の見地から、Kurtz はアフリカ蛮人の伝統的風習に基づき、彼等、蛮人、にとっては種族的儀式であるが故に、如何なる精神的墮落をも感じえないが、象牙採集の目的のためとはいえ、一度文明の洗礼を受けた文明社会人にとっては、文明社会そのものが如何に欺瞞的であれ、自己の精神的、道德的墮落を感じずにはおられないような野蛮な行為をおこない、そうした行為に基づいて彼は蛮人達のために彼等を支配すると同時に、彼等の存在なくして彼の行為は考えられない点において、彼は彼が支配している蛮人の支配を受けているのである。すなわち、自己を蛮人の神として犠牲にささげるとともに、象牙採集のために、野蛮な権力への本能を満足させるために、彼等を彼の犠牲者としている点を指摘している¹⁰⁾。云うならば、彼等両者は各自の力を維持していく過程において、他者を絶対的に必要とするのであり、決し

て失うことの出来ぬ関係にあり、逆に他者の力の搾取により自己の世界の崩壊を招いているのである。従って両者の生存条件は永久に他者を拘束しつつ、かつ拘束され、ともに滅亡する運命という悲劇的なものとなる。唯、Kurtz の場合、その関係維持は自己の精神世界の墜落を招いているゆえにより深刻な苦悩となる。“Exterminate all the brutes!”はこの泥沼にはまりこんだ Kurtz の精神的苦悩の叫びである。従って暗黒の世界において、盲目的に、物欲に取りつかれた如く、ひたすら物欲を象徴する象牙採集に精根を傾ける Kurtz の意図は ideal truth を信じられなくなった彼の、己の力の限界への、彼をとらえて離さぬ闇の世界への絶望的な挑戦なのである。しかもその戦いは Kurtz にはほとんど勝算のない戦いであった。何故なら闇の世界には余りにも味方が多すぎるのである。アフリカの太古の原始林は Kurtz に闇の醜悪な魅力をなげかけ、彼が行動しうる環境を提供し、又 Kurtz によって支配を受けた蛮人は Kurtz の手先となって Kurtz の本能的欲望を助長させ、彼にその欲望のおもむくままに行動しうる手段を与えているのである。Kurtz はこうした彼の置かれている状態を十分に認識していたからこそ、若い Russian の言葉に耳をかし、“帰る”ことにも同意したのであろうが、彼は自己を抑制し、自己の中心となるべき、自己の内なる力により創造された信念という最大の味方を欠いていたのである。その結果として信念を欠く Kurtz は自己の精神的荒廃を嫌悪しつつ、闇の力に魅せられて、自己の内にある野蛮な本能に屈して留るところを知らぬ精神的荒廃の泥沼の中に陥ち込んでいったのである。

最後に発した“The horror the horror”という彼の叫び声は、人間が虚偽の観念世界に留っている限り、人間は観念世界以外の世界に対しては無関心であるが、置かれた環境により、闇の世界に接する時、真実は観念世界において考えられているようなものではなく、無観念無時間性、無法則性を備えた予測を許さぬ chaos な世界なのであることの承認である、それは又観念世界において常に諸観念や、道徳、主義を批判することを許されずに一方的に与えられてきた人間が、自我の論理的不活動や、感情的な高慢さから自我の野蛮性を実証し始め、思想の退潮をきたした時点において、潜在的な無思想な感情が人間の心奥にある自己観念を刺激し、ego のおもむくままに行動に走らせる自制心をもたぬ人間の陥ち入る底知れぬ精神的荒廃の恐ろしさ、人間をとらえて離さぬ闇の世界の恐ろしさの承認である。Kurtz の精神的荒廃は観念世界に留っている人間に想像される以上の不透明な闇の世界へ彼を連れていったのであり、その経験から発せられた最後の言葉は広範囲にわたる真実の普遍性についての陳述であり、別の世界に置かれた人間の状態の筋道のたった見解である。それらの言葉は人間は自己の内面世界の旅——無限の闇、意味のない無秩序、及び彼自身の精神の旅——から観念世界に帰りうるという彼自身の唯一の意識を明確に現わしているのである¹¹。

II

Marlow が Kurtz にひきつけられた原因はある一面において現代社会の代表者といえる pilgrims の中に見られなかった一つのものに自己を没頭させ、激しく燃えあがる Kurtz の情熱

の強さであったのであろう。 *Under Western Eyes* における Sophia Antonovna, *Natashia Haldin*, *Nostromo* における Charles Gould, *Lord Jim* における Jim のように自己の信念、自己の夢 (ideal truth) に激しく燃えて (burn) 生きる姿が Kurtz の情熱の中に見られるのであり、逆に Marlow をして pilgrims を嫌悪させているのは彼等が既成観念にとらわれ、創造的なものをもたず、無為に人生を腐って (rot) 生きているその姿に他ならない。しかし Marlow は Kurtz の語る理想主義に、物事に夢中になる情熱の強さに魅せられたが、決して Kurtz の狂気に賛同しているわけではない。Kurtz はアフリカの太古の世界において、荒野のもつ魅惑、闇の力の強さを意識することも出来ず人生を踏み外すことすら出来ぬ愚鈍な pilgrims や出張所の支配人とは異なって、単身、狂気をもって闇の世界に絶望的な戦いを挑んだ人間ではあったが、Marlow はその冷静な判断力のためか？あるいは船乗りの仕事に対する責任感のためか？おそらく闇の世界へ自己を投入れることを抑制しうる自制心を持ちあわせていたのであろう、Kurtz の精神変化を鋭く看破し、文明社会の観念世界と Kurtz の侵入した闇の世界の境界線上に位置したことはあったが、又その二つの世界を区分している隔壁から闇の混沌とした世界を一瞬垣間見てはいるが、決してその世界に侵入することはなかった。

Since I had peeped over the edge myself, I understand better the meaning of his stare, that could not see the flame of the candle, but was wide enough to embrace the whole universe, piercing enough to penetrate all the hearts that beat in the darkness. 12

True, he had made that last stride, he had stepped over the edge, while I had been permitted to draw back my hesitating foot. 13

すなわち marlow は Kurtz という人間により、自己の人間性の試練を受けたのであるが、彼は ideal truth の虚偽と idealess truth の恐ろしさの両方を認識しながらも、どちらにも屈することなく自己の永遠の真実である内なる声 — inborn strength — に従って、真実を直視し、自己の本能を自制し、自己の内なる声に忠実な人間として行動したのである。ここで我々は *Lord Jim* における Stein の忠告を思い起こしてみよう。

“A man that is born falls into a dream like a man who falls into the sea. If he tries to climb out into the air as inexperienced people endeavour to do, he drowns — *nicht war?*…… No! I tell you! The way is to the destructive element submit yourself, and with the exertions of your hands and feet in the water make the deep, deep sea keep you up. So if you ask me — how to live?” 14

Stein は Jim に destructive element (idealess truth) の中に自己を投げ入れ、自己の ideal truth を捨てることによって真の自己を発見する道を説いた。しかし観念自我を絶対的に信じ、又信じようとした Jim は idealess truth に自己を対決させることなく死に至る迄、自己の観念自我に忠実に生き、観念自我を最終的には死によって、ある意味において、内なる声と一致させたと云える。一方 Kurtz は ideal truth を投げ捨て、idealess truth に自己をまかせアフリカ大陸

をも征服しようとする本能のおもむくままに活動したのであるが、圧倒的な闇の力の前に自己の破滅を招いたのである。Jim にしろ、Kurtz にしろ、両者が自己破滅を招いた原因は今迄の観念世界とは全く異なった闇の世界に直面した時、両者は現代社会人が応々にして欠いている内なる声を欠いている故に、Jim は *idealess truth* を認めようとはせず、Kurtz は *idealess truth* のなすがままになり破滅を招いたのである。従って *Heart of Darkness* において、marlow が闇の力に屈しなかつことは自制心をもった Marlow の精神的勝利である。

Marlow はヨーロッパ共同体の観念論、実証主義は虚構の伽藍であり、人間の知性の鋭い感受性を鈍らし、狂気の待ち伏せている限界線を踏み越えさせないように、平和に平安に住らせるよう人間の心の眼に被せられた眼帯であり、真の自由に向って突進する人間の頭上に重くのしかかっている鎖であることを十分に認識しておりながら、文明世界を捨て去ることが出来なかったのは、Kurtz のアフリカ大陸における精神的破滅は真の現実を直視し、混沌たる現実には屈しない自制力をもたぬ近代社会に住む現代社会人がその属する共同体の社会的拘束力が除去される時にたどるべき運命であると考えたからであろう。我々が観念的な *ideal truth* を捨て、自己を *idealess truth* に直面させ、その中であって真の自我を見出し生きていくためには Stein や Marlow のように *inborn strength* を所有していなくてはならない。しかし実に皮肉ではあるが、*cannibal* がもっていた自制心をもたぬ現代社会人はそうした機会に直面すると破滅の道を進む故に、*idealess truth* に直面する危機を自己の属する共同体によって守られなくてはならなくなる。Marlow はこうした精神的に弱い、自らの内に創造的な力をもたず、時間、観念、法則等によって作り上げられた現代社会に住む現代人の欠点を十分承知していたのである。何故ならば Marlow はアフリカから帰った後、一時的には警察国家であるヨーロッパ共同体に住む人々に

I found myself back in the sepulchral city resenting the sight of people hurrying through the streets to filch a little money from each other, to devour their infamous cookery, to gulp their unwholesome beer, to dream their insignificant and silly dreams. They trespassed upon my thoughts. They were intruders whose knowledge of life was to me an irritating pretence, because I felt so sure they could not possibly know the things I knew. Their bearing, which was simply the bearing of commonplace individuals going about their business in the assurance of perfect safety, was offensive to me like the outrageous flauntings of folly in the face of a danger it is unable to comprehend. 15

とその嫌悪感を示してはいるが、最終的には彼が Kurtz の思い出を過去の中に葬ってしまうことを望んだのは、観念論者や実証主義者の説えるモラルそのものがたとえ虚偽であろうとも、一般大衆が平安な社会生活を営んでいく上においてそうした虚偽が必要となるのであれば、又現にそうしたモラルが必要である以上、それなくしては Kurtz の見出した *idealess truth* が自制心を欠く人間を破滅へと狂気へと追いやっていくものであれば、虚偽の信仰を人々に信じさせ平和にくらせるあの虚構世界を認めざるを得なかったのである。従って Marlow と Kurtz の許嫁との対面は Marlow の文明社会への復帰の試練であった。Kurtz の許嫁は “It’s queer how out of

touch with truth women are. They live in a world of their own, and there had never been anything like it, and never can be” と Marlow が強くいい切ったそのような観念世界に住んでいる典型的な人間である。彼女に対して Kurtz の思い出を語る自己の偽りの言葉に Marlow は憤りを憶えながらも、直視し難い真実を語りえなかったのは Kurtz の許嫁に対する彼の憐みの情であり、この観念的な虚構世界の承認であると同時に現代社会人に対する Marlow の心情的な同情の現われである。

更に Marlow が Kurtz の行動に賛同出来なかった理由は彼の行動の中にヨーロッパ共同体の武力と観念に隠された植民地主義、帝国主義の気配を感じとったからであろう。何故なら彼の押えることの出来ぬ闘争的な egoism は蛮人との関係において、蛮人を支配し彼等の生活領域からヨーロッパ共同体にとって利益とみなされる象牙を強奪する点で、観念的に帝国主義と連がるものがある。すなわち Kurtz を初めとしてヨーロッパ人達がヨーロッパ社会において身につけた理想主義をアフリカ蛮人に押しつけ、押しつけられた蛮人は Europeanize される過程において、彼等蛮人の存在基盤でありそれなくしては無秩序な個人にならざるをえない彼等の生活基準を与えてくれるより大きな真実と一体であるというあの意識をなくすることによって、又、彼等の属する共同体の確固たる秩序との彼等の関係を破壊されることによって、彼等自身の生活基準を失い、彼等の共同体を構成する構成員を欠き、ヨーロッパ文明社会の征服の前に有機的な共同体としての機能を失い、社会的崩壊を招くのである。我々はこのような Europeanize された蛮人の姿を Kurtz の死を告げる maneger's boy の蛮人と共に生活してきた Kurtz に対する痛烈な軽蔑を含んだ表現の中に、又操舵手である土人が船を襲った自分と同じアフリカの森林に住む蛮人の姿に恐怖し、怯えた様子の中に見出すのである。こうした蛮人達は完全に彼等個有の習慣を伝統をもつ共同体及び彼等の現実世界から分離し、宙に浮き、彼等の共同体の崩壊を速めているのである。

一方、ヨーロッパ共同体を代表する Kurtz はアフリカ蛮人及び暗黒の現実と接触することによって Africanize され、暗国大陸の所有する destructive force に直面し、ヨーロッパ共同体の光輝く理想主義の欺瞞に気づき、あの共同体の拘束を受けない領域において、現代社会人の中に眠っていた野蛮性を目覚めさせ、結果的には野蛮人以上の野蛮性を身につけ terrorism に走ることになる。我々はこの Kurtz の帝国主義的な性質と革命家に共通するファナティックな性質とを見るのである。そして Kurtz がヨーロッパ共同体に背を向け、蛮人の社会に君臨し続けたことは蛮人の社会における秩序の崩壊を招くと同時に、蛮人による現代社会の秩序の崩壊をも意味するのである。Conrad によれば共同体がその共同体以外の共同体を認めようとしないうち、全く異なった二つの共同体の接触は共に相手の共同体を崩壊させる要素をその内に含んでいるのである。そして Avrom Fleishman はその著 *Conrad's Politics* において現代社会と蛮人社会との関係について次のように述べている。

… Marlow finds his mixture of primitive belief and modern technical ability a grotesque distortion. The implication might be drawn from Marlow's (not necessarily Conrad's) tone that it is better to leave the natives in the jungle than to try to civilize them 16

それでは我々は独自の共同体の中でしか生きられないのであろうか？ Conrad の説くように我々の社会が欺瞞的な共同体であるなら、いかなる共同体を作りあげるように努力すべきなのか？ Conrad は Kurtz が闇の世界に飛び込んだ原因は彼の行動を拘束するヨーロッパ社会を欠いていたこと、彼が心的無秩序状態であったことを我々に語りかけている。すなわち、ヨーロッパ共同体を構成している大部分の者が Kurtz と同じく心的無秩序なのである。従って共同体がその拘束力を無くする時、ヨーロッパ共同体は崩壊する危険にさらされる故に、ヨーロッパ社会の観念論が、実証主義が、理想主義が如何に欺瞞的であれ、軽蔑しようが、個人を共同体の構成員としておく為には、その社会を認め、かつ個人の行動を抑制しうる道徳的、倫理的拘束力をもつ警察国家としての共同体を認めざるをえないのである。しかしそれ以上に大切なことは個人が個人的信念を自制心を身につけ、真の共同体としての有機的な社会を創造するように努力するところにある。

III

現代人は近代観念世界の拡大により、歴史的深さにおいても気の狂いそうになる程遠い原始の暗黒にまでつながっている人間の魂の闇の世界をその観念の奥底に追いやり、Marlow が不安と恐怖にしばしばみまわれつつも自己の魂とのつながりを実感せずにはいられなかつたところの、歴史の遠い暗闇に巨大な根をはった、あの実質的な有機体の実在を再び知ることなく生活しているのである。現代人の意識の上においては、これらの二つの世界は決して同時的時間に存在するものとして現われることはないとも思われる。しかし、実際は人間の魂の世界は過去の中に葬り去られたものではなく、仮眠の状態のままで常に現在という時制の中に存在しつづけているのである。現代人は time によって、発達した文明によって、時間的隔たりをもつ過去の世界をもはや存在しない世界——架空の幻——の如く考えがちであるが、過去は決して現在と断絶したものとして存在したのではなく、人間の知覚意識の内には過去の現象すらも現在の中にそして未来にも存在しつづけるのである。過ぎさったものが現代人の意識に現在と同一視されるものとしてのぼらないのは、この既成された観念世界の内にとどまり、外へ出ようとせず、他の世界を認めようとしないう現代人の怠惰であり、この観念世界の抽象的言語表現に全幅の信頼を置き他に目を転じようとしないう現代人の非創造的活動に外ならないのである。従って既成された死したる観念的言語にすがりついて生きている現代人は実質的な、気を狂わすばかりの *idealess truth* の世界と結びついて重みをもたずに、空中に空虚なままの状態で浮かんでいるのであり、その現実すら気付かないのである。すなわち、現代人は虚構の観念世界と暗黒世界のもつ *idealess truth* との同一的存在及び実質的な *identification* を、ただ、過去という単語と時間によってのみ無理やり切り離しているにすぎないのである。それは過去の世界を架空の幻とすることによって現実と架空の幻とを連結し、同一的存在として考える想像力の機能を停止しているのである。従って現代人は現代世界を全ての他の世界と分離し、同時的存在として他の世界を眺めようとする努力を払わず、この現代世界のみが存在するものとして他の世界とのつながりに

気付いていないのである。云うならば現実とは、時間、観念、法則性を超越した領域、すなわちすべてに渡って予測することの出来ない irrational な闇の世界なのである。この Conrad の思想は *Under Western Eyes*, *Lord Jim*, *The Secret Agent* 等において描写されているところであるが、この現在は思想、観念、法則、規律、時間等によって拘束されており、将来を予測しうるものと考えている時代に生き、真実を認識しようとする努力を払わない我々は、いわば、精神的な進歩なき時代に生きているのである。

この世界から脱出するためには現代人は自己の内なる魂の深みに目を向け、暗黒の内から時間を超越した過去の世界と現代及び未来を同一的存在として存在させる想像力を働かせ、魂の闇の世界の拡充をはかり、より新しいものを創造し、新しいものを発見するために自己の内なる声を昇舞し、内なる声に従って、創造的に生きる道を見出すことが光明の世界である現代から脱し、闇の世界である無限の創造をもつ世界を見出すこととなる。それなくしては現代人は精神的死の到来をただ手をこまねいて待つのみである。

BIBLIOGRAPHY

I. PRIMARY SOURCES

- Conrad Joseph. *Youth*. London: J. M. Dent and Sons Ltd., 1967.
 Stewart J. I. M. *Joseph Conrad*. London: Lowe and Brydone (Printers) Ltd., 1968.
 Fleishman Avrom. *Conrad's Politics*. Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1967.

II. SECONDARY SOURCES

BOOKS

- Guerard A. J. *Conrad the novelist*. Cambridge; Massachusetts: Harvard University press, 1965.
 Wiley P. L. *Conrad's Measure of Man*. New York: Gordian Press, Inc., 1966.
 Hewitt D. *Conrad*. London: Bowes and Bowes Publishers Ltd., 1969.
 Said E. W. *Joseph Conrad and the Fiction of Autobiography*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1966.
 Mudrick M. *Conrad*. A Collection of Critical Essays; New Jersey: Prentice Hall, Inc., 1966.
 Conrad J. *Tales of Hearsay and Last Essays*. London: J. M. Dent and Sons Ltd., 1963.
-

Notes

- 1) Conrad J. *Youth*. p. 56
- 2) Ibid., p. 82
- 3) Herwitt D. *Conrad*. p. 20
- 4) Conrad J. *Youth*. p. 131
- 5) Ibid., p. 79
- 6) Ibid., p. 90
- 7) Ibid., p. 97
- 8) Ibid., p. 144
- 9) Ibid., p. 118
- 10) Mudrick M. *Conrad*. p. 45—54
- 11) Stewart J. I. M. *Joseph Conrad*. p. 84
- 12) Conrad J. *Youth*. p. 151
- 13) Ibid., p. 151
- 14) Conrad J. *Lord Jim*. London: J. M. Dent and Sons Ltd., 1961. p. 214
- 15) Conrad J. *Youth*. p. 152
- 16) Flishman A. *Conrad's Politics*. p. 91